



Title	甑からみた韓半島の地域差と日本列島の甑の系譜
Author(s)	長友, 朋子
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 329-338
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105051
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

甗からみた韓半島の地域差と日本列島の甗の系譜

長 友 朋 子

はじめに

日本列島と韓半島の交流は古墳時代前期後半以降に転換期を迎え、鉄交易が拡大しつつ、渡金技術の到来、窯導入、馬匹生産の開始など、一定数の渡来人に伴うものへと変わった。そして、彼らが新たな炊飯様式をもたらし、竈に湯釜と甗をかける蒸し調理が始まる。そこで本論では、炊飯様式に着目し、渡来ルートと渡来人定着の様相について考察したい。

1. 甗に関する研究と課題

甗は韓半島における地域差が顕著なため、蒸気を取り込む底面の孔の形などに注目して日本列島出土甗の故地が追究されてきた（杉井 1993・1994、酒井 1998、寺井 2018、中野 2007、大阪歴史博物館 2017）。底部中央の円形の孔を囲むように小さな孔が配された平底甗は、百済や馬韓に多く、スリット状に穿孔された丸底甗は、伽耶や新羅に分布することが知られ、おおむね百済・馬韓と伽耶・新羅とに区別された。さらに、趙晟元は伽耶地域の軟質土器を調べ、平底と丸底の甗の境界が昌原、咸安、馬山周辺にあることを示した（趙 2016）。しかし、韓半島を東西に分ける地域差は把握できるものの、百済と馬韓の領域、すなわち韓半島西部の漢江流域、錦江流域、栄山江流域における甗の地域差が不明瞭であるという課題を残していた。

ところで、甗の細部には注目されてきたが、甗全体の形には、あまり目を向けられてこなかった。また、これまで竈と甗の関係については注目されていなかった。そこで、甗の形態と竈との関係に着目して新たな視点から甗を分類し、韓半島における甗の地域差を明確にしたい。そして、この地域差を踏まえ、日本列島出土甗の故地を明らかにする。

2. 韓半島における三国時代の甗の地域性

（1）新たな視点から見た甗の分類と分布

漢代の画像石に描かれた竈をみると、2つや3つの鍋をかけた竈が登場する。このように竈に掛ける鍋は複数ある場合も多い。韓半島の住居の床面には竈の痕跡が残り、竈の焚口には

図2 竈にかける釜数（長友・韓・鄭・金 2016）

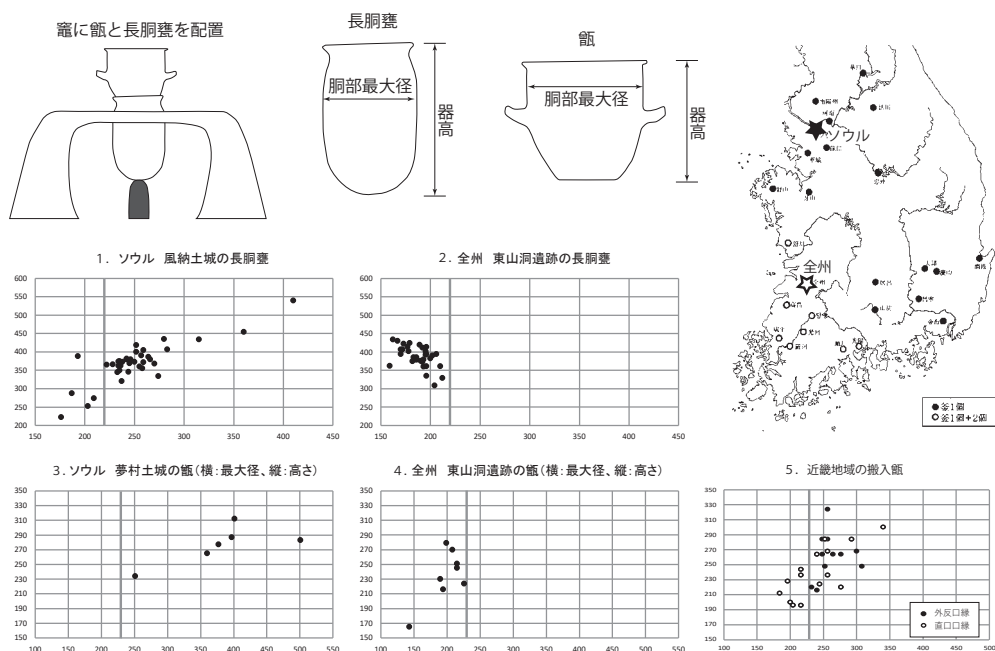


図3 長胴甕と甑のサイズ比較 (X軸: 胴部最大径、Y軸: 器高、単位: mm)

支脚が残存することから竈に掛けた鍋の数がわかる。これを調べると、韓半島の竈には一つ掛けだけでなく二つ掛けの竈があり、後者は地域的に偏りのあることがわかってきた（韓・長友2018、長友2022：図1）。すなわち、二つ掛け竈は湖西地域南部、湖南地域、嶺南地域西部に多く見られる傾向がある。中には、竈の両側に焚口があるものなど変則的な竈もあるが、二つ掛け竈の多くは、鍋を横に並べて配置する。二つ掛け竈の多い集落では、すべてが二つ掛け竈の住居で占められるのではなく、一つ掛け竈を持つ住居と、二つ掛け竈の住居が混在する（図2）。そして、住居に残る二つ掛け竈の幅は、一つ掛けが中心となる京畿地域の竈の幅と大きく変わらず、竈に2つの鍋をかけるので、細い湯鍋（長胴甕）が用いられたと推測される。実際に二つ掛け竈を用いる地域の長胴甕の太さを調べると、京畿地域のソウル風納土城の甑は22 cm以上のものが大半であるのに対し、湖南地域の全州東山洞遺跡出土の甑は胴部最大径がおよそ22 cm以下で細く長い形態をしていることがわかる（図3-1・2）。このような細く長い形の長胴甕にのせる甑はどのような形態であろうか。甑についてもこの2つの遺跡間で比較すると（図3-3・4）、全州東山洞遺跡では22 cm程度かそれよりも細いものが多い。そこで、寺井誠（2016）の集成を基礎に甑の胴部幅にも注目して甑を分類する。

（2）甑の分類と分布

甑の分布 楽浪土城出土甑や高句麗の甑は器高に対し胴部が太い（図4）。楽浪土城出土の甑は、

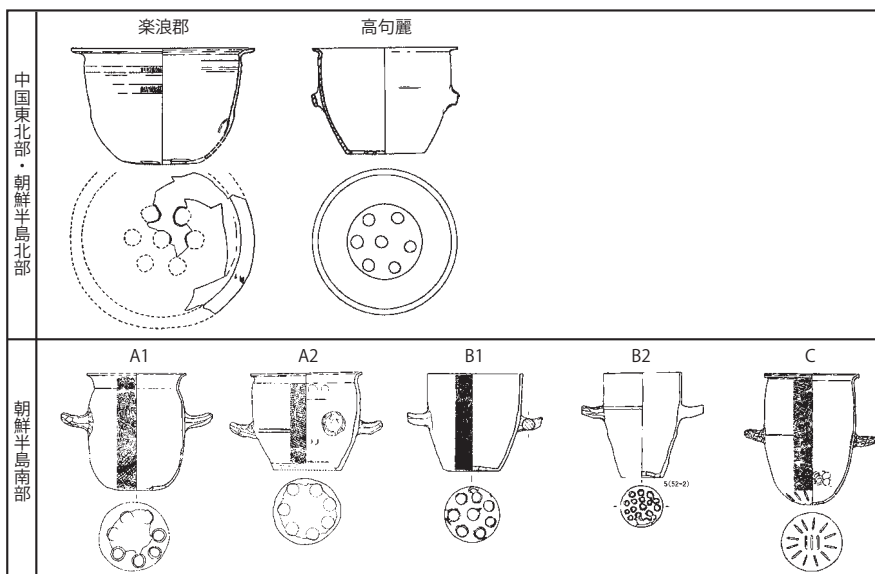


図4 甑の分類

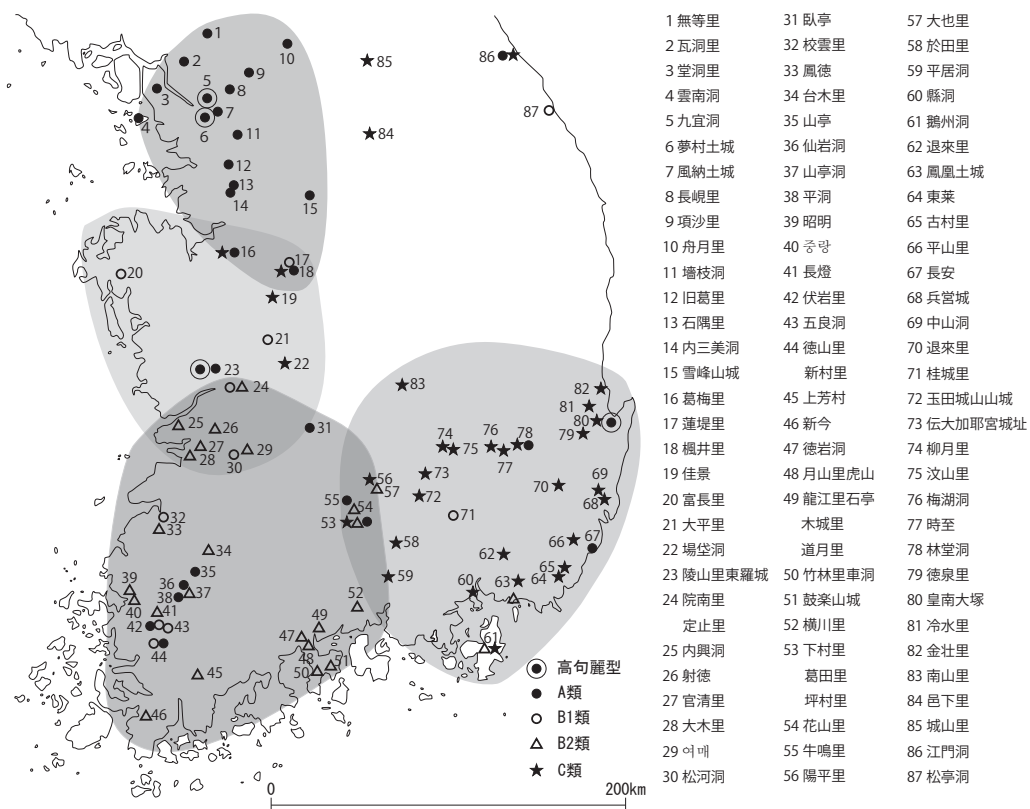


図5 朝鮮半島における型式別甑の分布

盆形土器に穿孔を施した形である。底部は叩いて隅丸を呈する。高句麗の甗は、底部付近に横方向のへら削りを残す場合があり、平底である。板状の把手を横方向に張り付ける。

韓半島南部の甗は、中島式土器や瓦質土器、三角形粘土帯土器の系譜をひく在地土器など、原三国時代の各地の土器の煮沸用土器を祖型としつつ、韓半島北部の甗を模倣して底部に孔をあけ把手を付けた形を呈する。これらの甗は、大きく3つに分けられる。口縁部が外反する形態で、太い胴部と隅丸平底あるいは平底をもつA類、直口口縁で平底のB類、外反口縁で底部丸底のC類である。A類の底面穿孔は、中心に円形の孔を施し、周囲に台形あるいは円形の穿孔を施す場合が多い。B類は中心に円形の穿孔を施し、周囲に円形の孔を穿つ場合が多い。C類はスリット状の穿孔を施す場合が多い。さらに、A類は隅丸平底（A1）と、平底（A2）に分けられる。B類は、胴部が22 cmよりも太いもの（B1）と、細いもの（B2）に分けられる。

以上の分類をふまえ、韓半島における甗の分布を示したのが図5である。京畿地域から湖西地域北部にかけてA類が分布する。B類は湖西地域から湖南地域にかけて分布し、胴部の太いB1類が一つ掛け竈を採用する湖西地域に、胴部の細いB2類が二つ掛け竈を採用する湖南地域を中心に分布する。さらに、C類は嶺南地域を中心に分布する。そして、これらの分布は排他的ではなく、一部重なりながら分布する。

客体的な甗 型式別に分布域は明瞭に分かれるが、その中に客体的に存在する甗がある。高句麗の甗は、韓半島南部において特徴的な分布を示す。ソウルでは夢村土城や九宜洞遺跡や、扶余の陵山里東羅城のような百済の中心的土城や墓域、慶州皇南大塚といった新羅王墓のように、中央政権に関連の深い遺跡から出土する。

また、B2類の分布する湖南地域で、A類やB1類の甗が伏岩里や五良洞などの羅州周辺にみられる点も重要である。伏岩里は梯子形を呈した在地の大規模墳丘墓であり、埋葬施設に百済の横穴式石室を導入しつつ、棺においては在地の甕棺を用いることで知られる。百済に取り込まれた在地首長の墓と理解するならば、そこにA類やB1類の甗が出土するのは、百済の人々が一定数移住したためにこのような炊飯具があると理解されよう。五良洞遺跡は甕棺を生産する大規模な窯跡であり、在地首長の支配下にあったと推測される。ここにも百済の人々の製作した甗がみられるのである。

さらに、C類の甗の分布する嶺南地域では、高句麗の甗だけでなく、分布域の東端にA類甗が少数見られる。林堂洞遺跡などではA類が出土し、皇南大塚では、高句麗の甗が見られる点は注意される。以上の韓半島の甗の地域色をふまえて、日本列島の甗について検討してみたい。

3. 日本列島の甗からみた渡来人の故地

日本列島においては、古墳時代前期に北部九州西新町遺跡で出現する（福岡県教育委員会

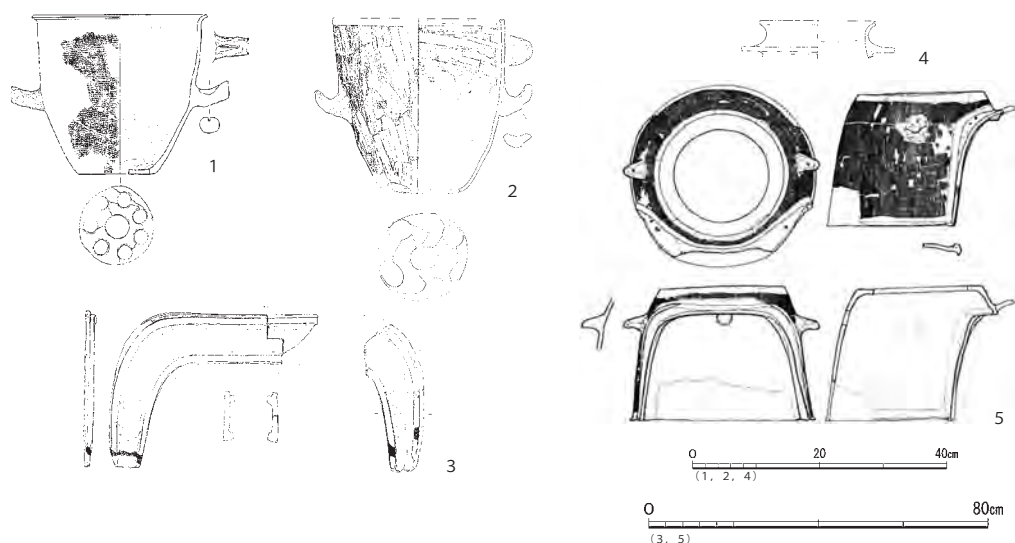


図6 葦屋北遺跡出土の炊飯用土器

2000、重藤 2006 ほか)。しかし、この地域では甗の使用が継続せず、周囲へも広く拡散しない。甗が普及するのは古墳時代中期からで、近畿地域を中心に分布する。甗には、この時期の韓半島と同じく外面を叩き仕上げするもの（図6－1）と、在来の甗と同様に刷毛調整で仕上げるものがある（図6－2）。前者は渡来人の製作した甗、後者は在来の技法が取り入れられているので、渡来人の子孫や在地の人が模倣した甗の可能性が高い。そこで、外面を叩き仕上げする甗について検討すると、ほぼ全て平底で、口縁部形態は外反（A類）と直口（B類）の両方があり、2/3ほどが后者である（図3－5）。外反口縁の甗の多くは胴部最大径が22 cmよりも大きく、京畿地域の甗と共通する。一方、直口口縁甗B類は、胴部最大径が22 cmよりも大きいB 1類と小さいB 2類があるが、総じて器高が低く、全羅道に特徴的な細く長い形態の甗は少ない。次に、外面が刷毛調整の甗については、直口口縁が多い。丸底や隅丸平底の底部形態は、在来の丸底甗の影響を受けた可能性がある。したがって、口縁部形態から韓半島西部の甗の影響を受けたことを知るにとどまる。以上から、近畿地方の甗は、嶺南東部を故地とするC類に類した甗は少ない。また、湖南地域よりも、京畿・湖西地域を故地とする甗が主体といえる。ただし、岡山県倉敷市菅生小学校裏山から見つかった甗は、スリットの入った丸底で外反口縁であることから、嶺南地域の甗の特徴を持つ点は注意される。

ところで、馬匹生産をしていたと考えられる寝屋川市讃良群条理遺跡や葦屋北遺跡では、甗や平底鉢とともに、竈の焚口枠や移動式竈、羽釜といった希少で特徴的な炊事関連遺物が出土している（図6－3・4・5）（大阪府教育委員会 2010、中野 2016・2023）。そこで、これらの遺物の故地を探るため、韓半島における出土地を示したのが図7である。これによると、竈

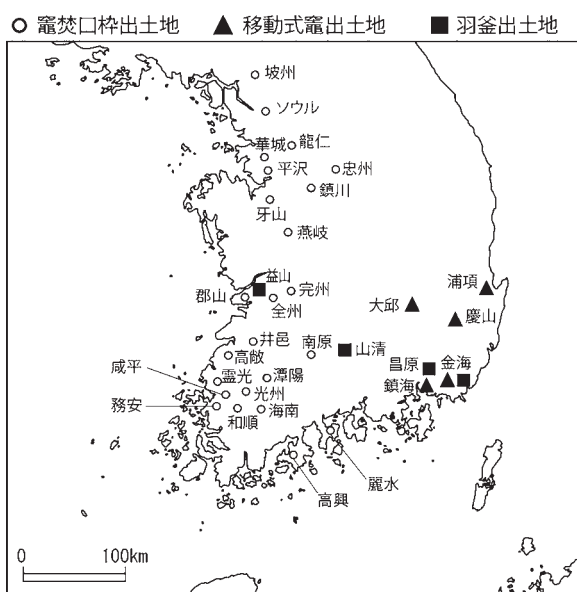


図7 竈焚口杵、移動式竈、羽釜の分布

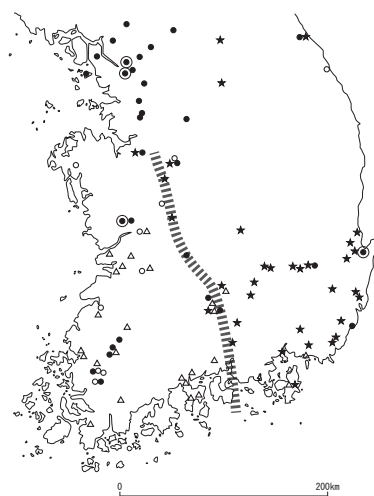


図8 A類とC類甗の拡散地帯

の焚口杵が韓半島西部、移動式竈が韓半島東部にあり、排他的な分布を示している。羽釜は、金海、昌海、山清、益山の遺跡から見つかっており、焚口杵と移動式竈のある両地域にまたがり、内陸部を横断するように分布する。一方、畿内地域においては、焚口杵や移動式竈、羽釜は大和、河内、近江、山城地域で見つかっており、数は少ないが広範囲にその分布が及ぶ。畿内地域の甗の故地である百済領域からだけでなく、移動式竈の存在により伽耶・新羅からも人や情報が集まったことがわかる。それをなし得るのは伽耶の地であり、羽釜の分布する内陸の道に沿って、百済や新羅から伽耶地域に人と情報、物が集まり、近畿地方へと伝わったと考えるのが自然であろう。韓半島においてA類甗が南へ広がる場所と、C類甗が北へ広がる場所は重複する。このA類とC類の甗の拡散地帯（図8）が、二つ掛け竈と一つ掛け竈の境界（図1）に位置する点は注意される。竈や甗といった炊飯様式を分かつ境界部分に、南から北へ抜ける道があったのではないだろうか。そして、初期須恵器の故地が、この道の南に位置する阿羅伽耶にあるのは偶然ではないだろう。この地に、航海術を持つ渡し人と船、関門海峡や瀬戸内海の通行に顔が利く水先案内人がいたのではないだろうか。

4. 炊飯具からみた渡来人の在地化

渡来人の定着の状況を、この大陸系の炊飯様式が在地化する様相から探ってみたい。韓半島から伝わった炊飯具は、長胴甗、甗と平底鉢である。韓半島では、平底鉢を炉や竈の焚口付近に置くなどして、炭で加熱し使用する。この3種の調理具がどのような組み合わせで出土した

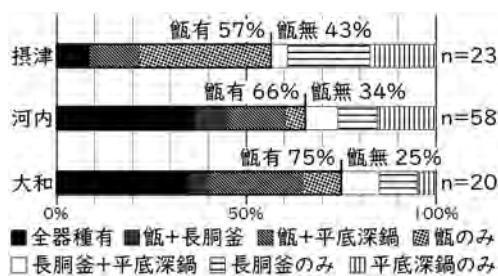


図9 摂津・河内・大和地域の軟質土器組成

かを、地域別にあらわしたのが図9である。これをみると、全種類がそろうのは、河内、大和地域で約35%なのに対し、摂津地域では10%に満たない。軟質土器出土遺跡のなかで、甑のある遺跡は大和地域で75%、河内地域で66%、摂津地域では57%となり、摂津地域の割合が最も低い。甑がなければ蒸し調理ができないので、より直接的に韓半島

の新たな炊事様式が伝わったのは大和、河内地域といえよう。

河内地域においては、韓半島系炊飯具が面的に出土する場所と点的に出土する場所のあることが指摘されている（中野 2008、中久保 2017）。渡来人の居住する地がある程度定まっていたのである。少し別の角度から炊飯具を検討してみよう。馬骨が出土した橿原市新堂遺跡の炊飯具の使用痕の観察をおこなった（妹尾・長友・小林 2021：図10）。すると、甑の内面に焦げがみられるだけでなく、外面に煤の付着が認められた。竈に掛けて使用すると竈上面には火焰が及ばないので、甑には煤が付着しないのが通常である。しかし、新堂遺跡の甑の外面に煤が付着するのは、火焰が直接接触する状態で使用されていたからだと推測される。そこで、内面に薄い焦げが水平に付着し、湯釜として使用された特徴を示す長胴の甕の外面を観察すると、煤が確認できた。竈で使用した場合、胴部最大径よりも上の部分は竈上面にでるので、煤が付着しないはずであるにもかかわらず、頸部には煤がついている。このような使用痕から、竈ではなく、炉に湯釜を置き、その上に甑を載せて蒸し調理をしていた様子を復元することができる。甕は頸部が締まり、なかには胴部最大径が中位より下にある甕もあり、竈に掛けるのに適していない形をしている点もこれを裏付ける。竈が導入されずに甑のみを受容した事例といえよう。これも炊飯受容の在り方のひとつであろう。なお、球胴の甕には、内面にべったりと穀物粒の付着するものもあり、炊飯による米炊きもおこなっていたことがわかる。

おわりに

韓半島には一つ掛けと二つ掛けの竈があり、後者は湖南地域から嶺南地域西部の集落を中心に用いられ、これらの竈に掛ける長胴甕と甑は細長い形態をしている。炊飯具の故地をたどると、百済南部の人々は伽耶西部へ内陸の道をたどって南下し、伽耶西部の人々の力を借りて日本列島へ向かった可能性が高い。そして、播磨地域などを経由して、大阪湾沿岸に到着した韓半島の人々は、窯業技術や鉄器生産、馬の飼育技術などを伝えた。大阪湾沿岸の遺跡からは、倭人が模倣して製作したと想定される刷毛調整仕上げの甑が多数出土する一方で、生産遺跡に

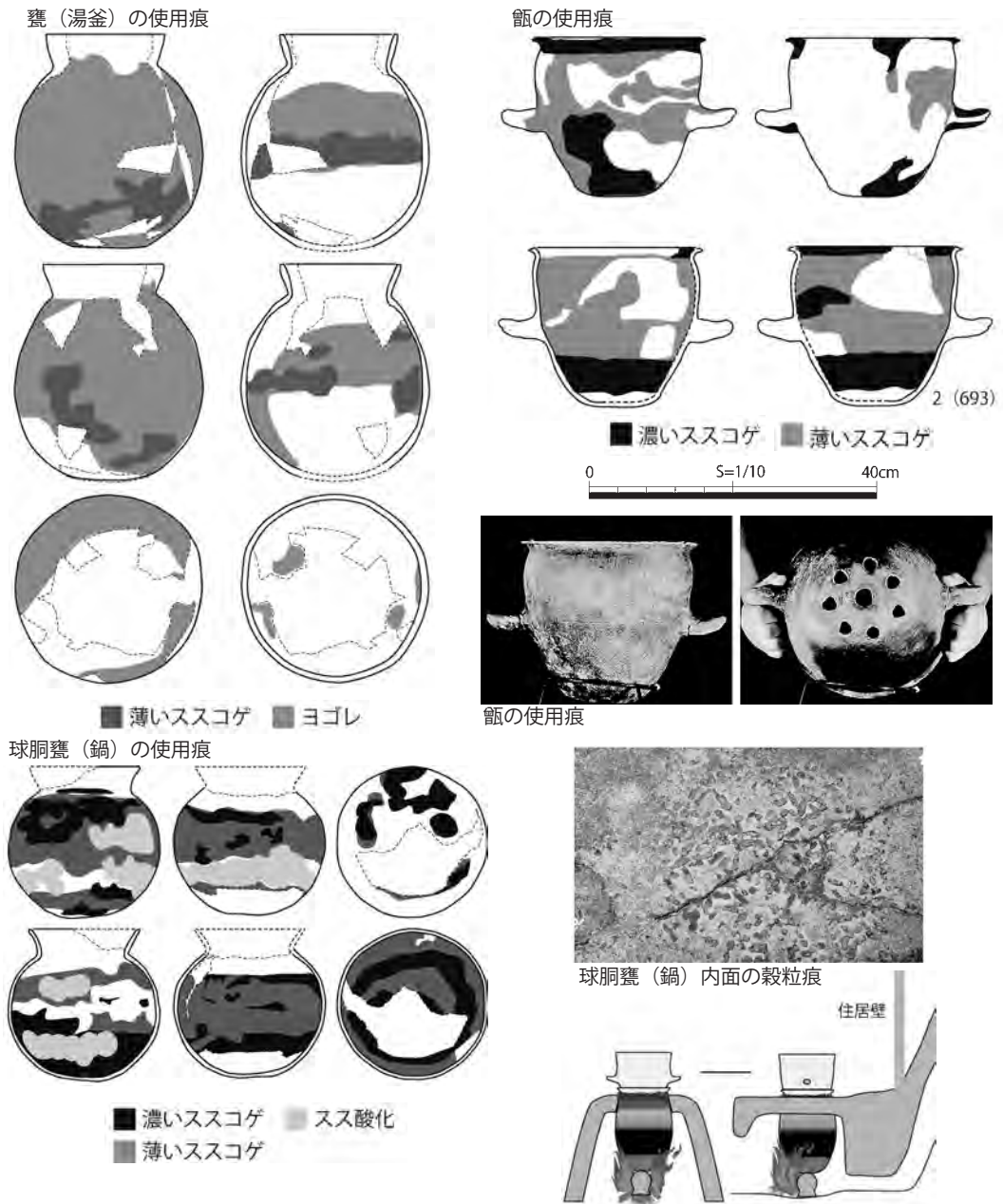


図10 橿原市新堂遺跡出土の甗の使用痕跡

は外面が叩き仕上げの韓半島の甗に近いものが多い。鉄器生産がおこなわれた大泉遺跡では伽耶西部と共通する甗が多く、牧の存在が想定される葦屋北遺跡には百済や伽耶西部など多系統の炊飯具が用いられる。この新たな炊飯様式の導入は、韓半島から渡来し新技術を伝えた人々の生活様式の影響によるものであり、騎馬文化の出現とも深く関わっていただろう。

謝 辞

博士後期課程入学以来、福永伸哉先生には丁寧なご指導をいただき、また節目の時に導きとなる言葉をかけていただき、大きな励みになりました。福永先生にいただいた導きや御恩を次世代へ繋げるよう、努めたいと思います。益々のご健勝とご活躍を心より祈念いたします。

引用文献

- 妹尾裕介・長友朋子・小林正史 2021「近畿地方における造りつけ竈導入期の米蒸し調理の選択的受容—奈良県新堂遺跡の炉による蒸し調理—」『物質文化』101 物質文化研究会、愛知：pp. 33-50
- 大阪歴史博物館 2017『渡来人いずこより』、大阪
- 酒井清治 1998「日韓の甗の系譜から見た渡来人」『檜崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、京都：pp. 27-38
- 重藤輝行 2006「西陣町遺跡と早良平野の古墳時代渡来人」『西新町遺跡 76』、福岡：pp. 233-245
- 杉井 健 1993「甗の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会、岡山：pp. 33-60
- 杉井 健 1994「甗形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』第28号史学篇 大阪大学文学部、大阪：pp. 31-56
- 寺井 誠 2016『日本列島における出現期の甗の故地に関する基礎的研究』平成25～27年度日本學術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書、大阪
- 寺井 誠 2018「渡来文化の故地と需要の多様性—近畿地方と岡山の集落資料を基に—」『日韓交渉の考古学—古墳時代—』『日韓交渉の考古学—古墳時代—』研究会・「日韓交渉の考古学—三国時代—」研究会、福岡：pp. 71-83
- 中久保辰夫 2017『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版会、大阪
- 中野 咲 2008「畿内地域・韓式系土器集成」『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』、京都：pp. 217-405
- 中野 咲 2016「羽釜と移動式カマドの受容と展開」『古墳時代の渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究』平成24～平成27年度科学研究費助成事業基盤研究（C）研究成果報告書、奈良：pp. 115-136
- 中野 咲 2023「土器からみた河内湖北岸地域」『牧の景観考古学』京都府立大学文学部、京都：pp. 95-116
- 長友朋子・韓志仙・鄭修鈺・金垠井 2016『第82回日本考古学協会発表要旨』東京学芸大学、東京
- 長友朋子 2022「韓半島における穀物の受容と竈・甗からみた地域差」『古墳時代の「台所革命」と東アジア』西都原考古学博物館令和4年度国際交流展図録、宮崎：pp. 51-64
- 韓志仙・長友朋子 2018「韓半島における一つ掛け竈と二つ掛け竈」『物質文化』98、物質文化研究会、愛知：pp. 121-134
- 福岡県教育委員会 2000『西新町遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第154集、福岡
- 趙 晟元 2016「4～5世紀代 慶南地域出土 軟質土器と土師器系土器」『日韓4～5世紀の土器・鉄器生産と集落』『日韓交渉の考古学—古墳時代—』研究会、福岡：pp. 9-43